

パーソナルネットワークにおける恋人との紐帯を測定する意義

——壮年単身者調査の再集計から——

金澤 良太

(せたがや自治政策研究所特別研究員)

[概要]

本稿は、パーソナルネットワークの調査研究において、恋人との紐帯を他のネットワークと区別して理解することの意義を主張することを課題とする。第1章では、これまでの調査研究では恋人が恋愛関係として把握されてきたことを指摘する。第2章では、パーソナルネットワーク研究のこれまでの展開について、大まかにまとめる。第3章では、パーソナルネットワークがどのように測定されてきたかを説明する。第4章では、これまでの議論をふまえて既存調査の再集計をおこない、恋人がパーソナルネットワークのコアメンバー（＝サポート関係）にあることを述べる。第5章では今後検討すべき点を指摘する。

1. 本稿の課題

本稿は、パーソナルネットワークの調査研究において、恋人との紐帯を他の領域 (domain) ネットワークと区別される社会的文脈 (social context) において理解することの意義を主張することを課題とする。理論と方法は一对一の関係ではないものの、お互いがそれぞれの発展に深く影響し、経験的研究の対象を規定する。そして、経験的研究の成果が理論の精緻化ないし修正や、方法論的な反省を促す。本稿では恋人との紐帯がパーソナルネットワーク研究の経験的对象として重要であることを指摘し、その含意について論じたい。

恋人の有無はどの調査でも質問されるような定番の項目とは言えないが、結婚や性に関する意識・行動をテーマに、青少年や若年層、あるいは独身者を対象とした調査で主に測定されてきた。代表的な例として、国立社会保障・人口問題研究所がほぼ5年おきにこれまで15回実施している『出生動向基本調査』の独身者調査や、日本性教育協会がほぼ6年おきにこれまで8回実施している『青少年の性行動全国調査』を挙げることができる⁵⁴。学術的調査においても、テーマや対象は同様の傾向にある。これまでの調査のほとんどにおいて、恋人との紐帯は結婚や性と関連する恋愛関係として位置づけられていると言ってよい。本稿では、日常的な生活課題の処理・解決におけるサポートの交換関係として恋人との紐帯を把握する必要性を主張する。

⁵⁴ 『出生動向基本調査』は第9回目まで『出産力調査』という名称であり、1982年の第8回調査から夫婦調査に加えて独身者調査が実施されるようになった(国立社会保障・人口問題研究所 2017)。『青少年の性行動全国調査』については日本性教育協会編(2019)を参照されたい。

ところで、パーソナルネットワーク研究において、恋人との紐帯がまったく測定されてこなかったというわけではない。都市社会学におけるパーソナルネットワークの代表的な研究者のひとりである C.S. Fischer は、1977 年から 1978 年にかけて実施した北カリフォルニア調査において、回答者に配偶者がいないときに「デートする、もしくは頻繁に会うフィアンセや 1 人の親友 (one best friend) はいいますか」と質問している⁵⁵。この質問は、比較的短い時間——Fischer が言うには 20 分から 30 分程度——で回答者のパーソナルネットワークのコアメンバーを把握するために開発された、一連の質問に含まれている (Fischer 1982: 36; 大谷 1995: 72)。家を留守にするとときに家の世話をしてくれる人、仕事上の決断について相談した人、この 3 ヶ月間に家事を手伝ってくれた人など 10 の項目について、それぞれ該当する人の名前を回答者に挙げてもらうのである。このような調査設計自体が、パーソナルネットワークの——とりわけ親しいネットワークの——把握にとって恋人の有無を聞くことが必要であるということの証左だといえる。とはいえ、彼は恋人との紐帯についての踏み込んだ分析をしていないし、それを研究目的としているわけでもなかった。

Fischer は、北カリフォルニア調査の成果である彼の主著『友人のあいだで暮らす (*To Dwell among Friends*)』に同調査の調査設計や調査の手続き、そして調査票など詳細な資料を方法的補遺として掲載している (Fischer 1982: 267-350)。そのため、Fischer の調査はネットワーク調査の範型のひとつとなっている。国内における調査では、恋人との紐帯はおそらく研究戦略上さほど重要な項目でない、あるいは実態把握にとって必要性が低いとみなされたのだろう。明確な理由を特定することは難しいが、調査票に含める質問の優先順位としては低かったことから、これまでほとんど測定されることがなかったものと思われる。近年になって、ようやくパーソナルネットワークにおける恋人との紐帯が個人に及ぼす独自の効果が指摘されるようになった状況にある (例えば原田 2017: 117-26)。恋人という存在への注目は、結婚しないというライフコースを選択する人々が今や相当数いるという現実を反映している。本稿は、社会の変化に応じてネットワーク調査のあり方を再考する必要があるということにも言及する。

本稿の構成は次のとおりである。まず、パーソナルネットワーク研究がこれまでどのように展開されてきたかを駆け足で振り返る。次に、パーソナルネットワークの測定が、調査対象や調査手法に制約され、限られた範囲や側面に関心が限定されてきたこと、そして、それに対して理論的かつ方法論的批判がされていることを確認する。そのうえで、既存のデータセットの集計・分析からサポートネットワークとしての恋人の重要性を主張し、今後の調査でどのように恋人とのネットワークを測定すべきかを述べる。

⁵⁵ Fischer の北カリフォルニア調査については、大谷 (1995: 72-3) が簡潔に紹介している。質問文は Fischer (1982: 314-45) に掲載されている調査票から訳出した。

2. パーソナルネットワーク研究の展開

パーソナルネットワークとは、ある個人が他の諸個人と結びつながらることである。日本の社会学においては、とりわけ都市社会学において組織的かつ精力的に調査研究が積み重ねられてきた⁵⁶。実証に重きを置く都市社会学のなかでも、パーソナルネットワーク研究ほど調査票を用いた量的調査の方法についての議論が深められ、標準化の進んだ分野はないだろう。パーソナルネットワークを測定するための調査設計から質問文の細かな言葉づかいにいたるまでオープンに議論され、調査によって得られたデータの信頼性・妥当性が検証され、その成果がその後に実施された調査にフィードバックされているのである（大谷 1995; 森岡 1998; 平松ほか 2010）。パーソナルネットワーク研究は、都市社会学において、その地位が確立した一分野である。

ところで、パーソナルネットワーク研究は特定の学問分野に限定されるものではなく、様々な領域に応用可能な研究アプローチの一種だと言える（安田 1997, 2011）。なぜ都市社会学においてパーソナルネットワーク研究が主要な潮流のひとつとなったのだろうか。森岡編（2004）によれば、大まかに以下のように説明できる。

都市社会学における代表的な理論仮説のひとつとして、「都市化が第一次の関係を衰退させる」という仮説がある。第一次の関係とは、全人格的で親密な関係のことをいう。そのような人間関係は都市化が進行するほどに衰退し、それにかわって合理的で打算的な関係、いわゆる第二次の関係が支配的になるという認識は、都市社会学の源流といえるシカゴ学派の基調をなしていた。そして、第一次の関係の衰退という多くの研究者に共有されていた認識が、L. Wirth が 1938 年に発表した論文「生活様式としてのアーバンイズム（Urbanism as a way of life）」において、都市社会学が検証すべき仮説として定式化されたのである（Wirth 1938=2011）。

「第一次の関係の衰退仮説」を検証するには、単純化すると、都市度の異なる地域で親密なパーソナルネットワークの量を測定し、比較すればよいということになる。都市度は都市の定義にも左右されるが、一定の地理的範囲における人口量や人口密度をもって操作化するのが通常であるから、研究者にとっての主要な課題としてはパーソナルネットワークの測定が残されることになる。かくして、都市社会学においてパーソナルネットワーク調査が盛んにおこなわれるようになったのである。

パーソナルネットワーク研究は長らく都市社会学の主要な研究領域であった。「第一次の関係の衰退仮説」が時代遅れになってからも、Fischer（1975=1983）や B. Wellman（1979=2006）といったネットワーク論者たちは経験的調査での検証に値する魅力的な仮説を次々と提示したからである（松本編 1995; 大谷 1995a; 野沢編 2006）。日本の研究者も、単に海外の研究動向の紹介にとどまらず、国内の都市をフィールドに盛んに調査が実施された。2000 年代後半になると、直接ないし間接的にパーソナルネットワーク調査を受け継いだ研

⁵⁶ パーソナルネットワークの調査研究をリードした研究者による振り返りとして、森岡（2013）がある。

研究者が、その洗練された方法を老年学や社会関係資本論、孤立研究などに応用していった（たとえば石田 2011）。

3. 従来の調査におけるパーソナルネットワークの測定

しばしば指摘されるパーソナルネットワーク研究の問題として、そこで測定されるパーソナルネットワークが比較的親しい他者とのつながり、いわゆる親しいネットワークに限定されがちであるということが挙げられる（森岡 1998, 2013）。どのような調査方法を用いても、調査者がある個人のパーソナルネットワーク全体をあますことなく把握するのは容易ではない。人の記憶には限界もあり、そもそもある個人のパーソナルネットワークの全体を特定することは当の本人にとってもほとんど不可能である⁵⁷。したがって、特に対象者の自己申告にもとづいてデータを収集する調査票調査の場合は、データの信頼性と妥当性の観点から親しいネットワークに測定の対象を限定せざるをえないという事情がある。多くの調査票では、「日頃から何かと頼りにし、親しくしている〇〇の方」という言葉づかいで親しいネットワークを測定する図1のような形式の質問が用いられている⁵⁸。

問××. あなたが日頃から何かと頼りにし、親しくしている仕事関係の方（同僚、取引先、同業者、元同僚など）は何人くらいいますか。その方のお住まいまで普段使っている交通手段でかかる時間別に人数をお答えください。			
30分未満	30分～ 1時間未満	1時間～ 2時間未満	2時間以上
<input type="text"/> 人	<input type="text"/> 人	<input type="text"/> 人	<input type="text"/> 人

図1 親しいネットワークを測定する質問の例

出典：森岡（2006）、石田ほか（2016）に掲載の調査票を参考に作成

⁵⁷ ネットワーク測定の手法については Marsden（2005）に詳しい。

⁵⁸ 図1とは異なるネームジェネレータと呼ばれる質問形式もある。ネームジェネレータ方式では、親しく付き合っている人を数人想起してもらい、その人の性別や年齢、職業といった社会的属性や、回答者とその人との付き合いに関する様々な側面（知り合ったきっかけ、付き合いの長さ、付き合いの内容、接触頻度など）、想起された人どうしの関係性といった点を質問する（安田 1997: 69-75；星 2010）。なお、ネームジェネレータ質問の基本となっているアメリカの1985年GSS（General Social Survey）調査のネットワーク項目においては、最近6か月間であなたにとって重要なことについて話をした人を5人まで挙げてもらっている。ネットワークジェネレータ方式の質問は、どうしても複雑になりがちである。したがって、社会調査法の観点からいうと、郵送調査のように対象者自ら調査票に記入する自記式の調査では回答が困難となり、無回答が多く発生すると考えられる。一方で、自記式でも回答可能なように簡素化された質問も工夫されており、実用に耐えることがわかっている（星・石田 2002；星 2010）。パソコンやスマートフォンで回答するWeb調査では、質問自体は複雑であっても回答の難しさをかなりの程度低減できるので、ネームジェネレータによるネットワークの測定は今後より現実的な手段となるだろう。

親しいネットワークが集中的に調査・分析されたゆえに研究の焦点が多くの研究者に共有され、したがって様々な研究で有力な仮説がテストされることとなり、パーソナルネットワーク研究が実り豊かな成果を生んだという評価もある（森岡編 2000）。しかしながら、多様な展開が可能なネットワークアプローチの可能性を狭めていた側面は否めない⁵⁹。

以上のような傾向に対し、その修正を試みた研究として森岡らのグループによる年賀状調査がある（森岡 1998, 2001, 2008; 矢部 2000, 2002; 高木・矢部 2002; 柳 2002）。年賀状調査はその名の通り、ある個人が有するパーソナルネットワーク全体をほぼ網羅した資料として年賀状を採用する。ある個人がある年の正月に受け取った年賀状は、自己申告よりもデータの客観性が高く、利用可能な資料の中でもネットワークを（少なくとも年賀状調査が集中的に実施された 1990 年代後半においては）広範に反映していたからである。そして、年賀状の 1 枚 1 枚について、それを送ってきた人物が対象者本人にとってどのような存在であるかという主観的な意味づけや解釈を聞き取る。そうすることで、親しい他者とのネットワークに加えて、その外縁に広がる、さほど親しくはない他者とのネットワークをも析出することに成功している。

年賀状調査は、さほど親しくはない他者を含むパーソナルネットワークを測定しているとともに⁶⁰、質的調査の強みを生かし、従来の調査票調査では見逃されてきた、あるいは測定が困難であったような、ネットワークの内実の詳細に関するデータを得ている。年賀状調査では、聞き取りに際して、年賀状を対象者に自由に分類をしてもらう。それにより、対象者が有するネットワークの全体について、個々のネットワークが形成された社会的文脈（たとえば学生時代、職場、趣味、ボランティア活動など）を対象者がどのように意味づけ、分類して理解しているのかという、基礎的なデータを得ることに成功している。このような主観的分類の仕方は対象者の社会的属性とライフコースによって異なるものの、多くのケースでは「親戚と、親戚以外という 2 次元の構成がとられ、その中で親しさの程度による分類がおこなわれた」（森岡 2000: 203）ことが明らかとなっている。さらに、親戚の中でも「特に別居の親や子は特別の存在とみなされている」（森岡 2000: 203）ということを付け加えている。

年賀状調査の知見は、計量的調査における調査票の設計の妥当性をかなりの程度裏付けるものである。多くの調査票では、親しいネットワークのサイズ（＝人数）を測定する際、家族・親戚のうち親・子・きょうだいは他のネットワーク質問とは異なる形式の質問が設けられている。そして、その他の親戚（≡別居の親戚）については「親しくしている親戚」といった表現が用いられることが多々あるが、親や子については質問文中で「親しくしている

⁵⁹ 都市社会学以外の分野に目を向けると、M. Granovetter (1973=2006) の転職行動に関する研究のように、親しいとは言えないネットワークが人々の行為や資源の獲得にとって重要であるという研究が少ないながらも存在する。

⁶⁰ 森岡 (2001) は、親しいネットワークがパーソナルネットワークと呼びならわされてきたことを踏まえて、本来の意味でのパーソナルネットワークを拡大パーソナルネットワークと呼んでいる。

親」とか「親しくしている子」という表現をすることはまずない。実際の調査票では、対象者本人(と配偶者)の親の有無、きょうだい数、子ども数が個々の質問で確定されたうえで、一連のネットワーク項目として親しい別居の家族・親戚⁶¹、仕事関係の友人・知人、近所の友人・知人、その他の友人(いわゆる Just Friends)⁶²という順にネットワークを測定する質問が並べられる⁶³。このように、調査票を用いた計量的調査において、回答者に違和感のないような測定方法が開発されているのである⁶⁴。

パーソナルネットワークの測定については、精力的な方法論的検討の結果、研究者の間でかなりの程度共通する基本的方法が確立できているとあってよい。それは実証研究を組織的・体系的に進めるうえで、非常に重要な条件である。筆者もこれまでのパーソナルネットワーク研究における方法論的洗練と標準化を否定するものではない。しかしながら、測定については社会的現実を踏まえた再検討を常にすべきである。EメールやSNSによる交流が拡大し、パーソナルネットワークの形成・維持・再編のあり方が大きく変容した現在において、年賀状調査がかつてのような強みを発揮できるかどうかについては再検討の余地がある。年賀状調査の手続きや考え方を参考にしつつ、現在に適したデータソース(例えばSNSのフォロー・フォロワー関係)を用いた質的調査の手法を開発していくことも必要だろう。また、調査票調査においても、社会の変化に対応すべく、ネットワーク質問の構成やワーディングを適宜修正していかねばならない。たとえば、友人数の質問において、近年、比較的若い世代の回答者に数百人に上る非常に多い人数を記入するケースが散見されるようになってきている。これはおそらくSNSの利用に起因するのだろう。また、友人の定義そのものが徐々に変わりつつあるのかもしれない⁶⁵。友人ネットワークの分類や質問文のワーディングの改善が求められよう。

新たな調査手法の開発ないしは既存の測定方法の修正・改善にかかわる論点は多岐にわたるため、ここで網羅的に検討することはとてもできない。以下では、恋人との紐帯を調査分析することの必要性に論点を限定して論じたい。

4. パーソナルネットワークにおける恋人

4.1 サポートネットワークとしてのパーソナルネットワーク

パーソナルネットワークは、研究目的に応じて、ネットワークのサイズや紐帯の強さ、機

⁶¹ 別居の家族・親戚に親と子を含めることもあれば、親と子は除くこともある。どちらにするかは、分析するときどちらの方が便利かということと、調査票の他の質問との兼ね合いによって決まる。

⁶² Just Friends とは、あえていうならば、友人としか表現しようのない友人のことである。Fischer (1982) を参照。

⁶³ 学校時代の友人を測定するなど、研究目的によってネットワーク項目はマイナーな変更がされることもある。

⁶⁴ かつて当研究所がおこなった調査でも、同様の方針が採用されている。『せたがや自治政策 Vol.2』の p.43～p.45 を参照されたい。

⁶⁵ 友人を定義・測定する難しさについて、大谷 (1995b) が詳しく論じている。

能など、いくつかの側面から調査される。また、すでに述べたように研究方法による制約もある。現在でもパーソナルネットワーク研究においては調査票調査が支配的であり、何らかの意味で親密なネットワークの測定を主とする場合が多い。以下に引用する Fischer の北カリフォルニア調査がそうであるように、パーソナルネットワークのコアメンバーの測定がサポートの交換関係の測定とイコールであることもしばしばである。

関係は相互作用と交換として定義される。ある人物は、彼ないし彼女が諸活動を共有する人々や、物質的・情緒的な援助をしてくれる人々、そして、その見返りとして同様のものを受け取る人々と関係を取り結ぶのである。……〔筆者注：面接調査時の〕基本的な手続きは、回答者にとって重要な人々の名前を挙げてもらい、次に名前が挙がったそれぞれの人物について質問するというものであった。われわれは、回答者に対し、回答者自身に様々な種類のサポートを提供してくれた人々、提供してくれるだろう人々、もしくは提供することが可能な人々の名前を挙げてもらうよう求め、それらの人物の名前〔の一覧〕を得た。回答者を援助する人々は、通常その回答者からお返しに支援されるのであって、概して彼・彼女のネットワークのコアメンバーであるとわれわれはみなした。(Fischer 1982: 35-6)。

サポートの交換関係としてのパーソナルネットワークは、個人の生活課題の処理・解決に寄与する。サポートネットワークは、パーソナルネットワークの資源ないし機能としての側面に着目した派生概念ないし下位概念だと言える⁶⁶。サポートネットワークの測定は老年学や孤立研究などにおける実証研究と親和性が高いため、パーソナルネットワーク研究の方法がこれらの学問領域でもその強みを発揮しているというわけである。

先の引用にあるように、パーソナルネットワーク論者の Fischer は援助を物質的(material)と情緒的(emotional)の2つに分けて理解している。これとほとんど対応するが、サポートの交換関係とその効果に着目する社会的サポート研究において、サポートは情緒的サポート(emotional support)と手段的サポート(instrumental support)の2つに区別して把握される⁶⁷。情緒的サポートとは「愛情、共感や理解、自己肯定感(esteem)を維持／増大させるような支援」(原田 2017: 19)であり、手段的サポートは「経済(金銭)的な援助や、掃除・洗濯や買い物の手伝いなど、人びとが抱えている諸問題を直接的・間接的に解決する実態的な援助」(原田 2017: 19)のことをいう。本稿も、この2つの区分にもとづいてサポートを理解する。

⁶⁶ 機能にはプラスの作用を及ぼす順機能とマイナスの作用を及ぼす逆機能がある。個人にとって逆機能をもつネットワークについても調査研究が進められているが、そのような逆機能的ネットワークを指し示す用語は統一されていない。原田(2017: 19-20)は先行研究を踏まえて、「否定的相互作用」と呼んでいる。

⁶⁷ instrumental support は道具的サポートと訳されることもあるが、本稿では一貫して手段的サポートという訳を用いる。また、社会的サポートを情緒的、手段的、情動的、評価的の4つに区分する考え方もある(Gottlieb 1978)。

サポートネットワークの測定においては、リソースジェネレータ方式の質問が用いられる(石田 2012)。リソースジェネレータ方式においては、「一緒に気晴らしをする」とか「病気の時に身の回りをしてくれる」などサポートを特定し、それを提供してくれるネットワークについて、その有無や人数、対象者との間柄、空間的距離などを分析の目的に応じて測定する。対象者との間柄とは、配偶者、親、子、親戚、友人など、パーソナルネットワークにおける領域別ネットワークに相当するが、それらに加えて、サポートネットワークに関しては専門家や専門機関が挙げられることもある。というのは、それらが資源としてどれくらい重要であるのか、親密な他者からのサポートをどれくらい代替できるのか、といったことも焦点となるからである。

4.2 壮年単身者調査の再集計

特別区長会調査研究機構は2019年10月、世田谷区・豊島区・墨田区在住の壮年期(35歳～64歳)にあるひとり暮らしの住民(壮年単身者)を対象に『単身世帯の生活と意識についての調査』を実施した(以下、壮年単身者調査と呼ぶ)⁶⁸。同調査の概要と結果については、特別区長会調査研究機構(2020)に詳しい。以下では、壮年単身者調査の世田谷分のデータセットについて、ごく簡単な分析をおこなう。というのは、サポートネットワークを測定している質問において、恋人からのサポート提供の有無を調べているからである。

壮年単身者調査では、各区の住民基本台帳から単独世帯を5,000人ずつサンプリングしている。世帯分離等により、住基上は単独世帯であっても実態は異なる(1人暮らしではない)という対象者もある。したがって、回収率の算出はなかなか難しいが、特別区長会調査研究機構(2020:68)は世田谷区の推定有効回収率を18.6%(有効回収数は868件)としている。通常の調査と比べるとやや低めの回収率ではあるが、対象者を単独世帯に絞っており、概して調査協力を得ることが難しかったことによると考えられる。

4.2.1 サポートネットワークを測定している質問

本稿で分析に用いるサポートネットワーク変数を確認しよう。壮年単身者調査においてサポートネットワークについての質問とみなせるものは、問13(a)(b)と問26である(補遺を参照)。問13(a)は「気軽におしゃべりしたり、気晴らしする」相手、問13(b)は「仕事のない休日などに一緒に過ごす」相手について、回答者との間柄をマルチアンサーの選択肢で回答させている。これらは情緒的サポートについての質問である。問26の質問文は「あなたが病気やケガで入院や介護が必要になったとき、身の回りの世話をしてくれそうな方は

⁶⁸ 壮年期という年齢層について注釈が必要だろう。壮年期に何歳から何歳までの人が含まれるのかは、文脈によって異なる。また、年齢をいくつの層に分けるのかということによっても異なる。厚生労働省の健康日本21(平成12年度～平成24年度)では、人生の各段階として幼年期、少年期、青年期、壮年期、中年期、高年期の6つに分け、壮年期は25歳から44歳とされている。ともかく、壮年は中間的な年齢層であり、他の年齢層の定義を見直そうとする動き(たとえば日本老年学会・日本老年医学会2017)やコモンセンスの変化にも影響されるため、一般的な定義をすることは難しい。

どなただと思いますか」というもので、手段的サポートについての質問だと言える。回答は、やはり回答者との間柄を選択肢から選ばせているが、そこに挙げられているネットワークのカテゴリーは問13と若干異なる。問26もやはりマルチアンサーである。

ところで、壮年単身者調査は、その調査設計からいって、配偶者のいないシングルの人々を主な調査対象として想定しているものと思われる。そのため、通常のネットワーク調査では取り上げられることが少ない変数が調査されている。サポートネットワークとしての恋人である。なお、選択肢のワーディングが「恋人・(元)配偶者・パートナー」という表現になっている点に注意しなければならない(補遺を参照)。というのは、未婚シングルと死別シングルの回答者がこの選択肢を選んだ場合は恋人を意味していると解釈できるが、離別シングルの場合、恋人であるのか元配偶者であるのかが判然としないからである。しかし、離別にいたるといことは両者の間に何らかの不和があったということであるから、本稿では、離別シングルが「恋人・(元)配偶者・パートナー」の選択肢を選んでいるケースについて、その回答は「恋人」を意味しているものとみなしたい。以下では、既婚の単独世帯と婚姻状況が不明の回答者を除いたケースについて分析する⁶⁹。

4.2.2 壮年単身者のサポートネットワーク

サポートネットワーク項目の単純集計結果は表1のとおりである。壮年単身者のサポート源として、情緒的サポートについてはいわゆる友人ネットワークが相対的に重要であることがわかる。しかし、手段的サポートに関していうと、友人ネットワークを選択する人は少なくなる。石田(2017)は、情緒的/手段的という軸と、軽い/重いという軸を交差させてサポートを軽い情緒的サポート、重い情緒的サポート、軽い手段的サポート、重い手段的サポートの4つに類型化している。「おしゃべり・気晴らし」は軽い情緒的サポート、「入院・介護時の身の回りの世話」は重い手段的サポートだとみなすことができる。「休日一緒に過ごす」を軽いとみなすか重いとみなすかは意見が分かれるところであり、石田(2017)の4類型にはきれいにあてはまらない。石田は重い情緒的サポートの具体的内容として「個人的な悩みごとの相談」を挙げている⁷⁰。「休日一緒に過ごす」は「おしゃべり・気晴らし」よりも重いが、「個人的な悩みごとの相談」ほどの重さではないだろう。あえて言うなら、中間的な重さの情緒的サポートとして理解できる。そのように考えると、友人ネットワークはサポートが軽いものであるほど、その有効性が高まると理解できる。

⁶⁹ 既婚の単独世帯には単身赴任などが含まれると考えられる。

⁷⁰ なお、他の類型のサポートの具体的内容として、軽い情緒的サポートは「気晴らしにでかける、おしゃべり」、軽い手段的サポートは「日常の用事を頼む」、重い手段的サポートは「病気のときの身の回りの世話」を挙げている(石田2017)。

表1 サポートネットワーク項目の単純集計結果

	情緒的サポート		手段的サポート
	気軽におしゃべりしたり、気晴らしする (n=807)	仕事のない休日と一緒に過ごす (n=798)	入院・介護時に身の回りの世話をしてくれる (n=814)
親	31.0	20.4	38.5
兄弟・姉妹	28.3	17.8	44.0
子ども	3.8	4.1	5.5
恋人・(元)配偶者・パートナー	26.3	26.4	15.6
その他親族・親戚	6.8	3.5	8.0
学生時代の友人・知人*	48.2	35.5	—
仕事関係の友人・知人	65.7	37.3	14.5
近所の友人・知人	10.4	7.0	6.0
それ以外の友人・知人	34.1	30.5	12.7
ケアマネやヘルパー等行政の専門家**	—	—	19.3
その他**	—	—	2.5
誰ともしなかった／誰もいない	6.9	19.7	15.6

単位：%

*手段的サポートの質問に選択肢なし

**情緒的サポートの質問に選択肢なし

手段的サポートに目を向けると、親と兄弟・姉妹が主要なサポート源となっている。しかしながら、親や兄弟・姉妹が含まれるところの親戚ネットワークのすべてに頼ることができるというわけではない。その他の親族・親戚に手段的サポートを頼むことができる人はかなり少ない。親族の中でお互いに家族であると認識している関係は、別居の親と子について森岡（2000）が指摘しているように、特別なものであるということを経験した結果となっている⁷¹。壮年単身者にとって、親と兄弟・姉妹は非常に重要な他者なのである。「入院・介護時の身の回りの世話」は重い手段的サポートであるから、現実的にはごく限られた範囲のネットワークに頼るほかないということであろう⁷²。

⁷¹ 家族という概念ほど、それをどのように定義すべきかをめぐって激しい議論が繰り返されている概念はないだろう（たとえば、久保田 2010）。社会学において頻繁に言及されるのは、「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的にかかわりあいで結ばれた、幸福（well-being）追求の集団である」（森岡・望月 1997:4）という定義である。この定義では家族的結合の感情的側面を定義に含めている。実態としては家族に特有の感情的結合が見られるとしても、それを定義に含めるかどうかは意見が分かれるところである。本稿では、家族を「夫婦をはじめ親子やキョウダイなどの近親者が相互に家族であるという認知をもち、またそれ以外の親族からも家族として認知されている時に成立する集団」（森岡 2010: 23）として理解しておきたい。

⁷² 壮年単身者調査では軽い手段的サポートについての質問がなかった。

4.2.3 パーソナルネットワークのコアメンバーとしての恋人

サポートネットワークとしての恋人に着目すると、「おしゃべり・気晴らし」が 26.3%、「休日一緒に過ごす」が 26.4%、「入院・介護時の身の回りの世話」が 15.6%であり、必ずしも際立った結果とはなっていない。ただし、この結果を解釈するうえで、2つの点に留意する必要がある。1点目は恋人の有無を壮年単身者調査では測定していないから、恋人のいる回答者のうち、いったいどれだけの人が恋人をサポート源とみなしているかがわからないということである。しかしながら、おしゃべりや気晴らしをせず、休日一緒に過ごすこともない恋人関係というのはごくまれだろうから、情緒的サポートのどちらかで恋人を選択した人と実際に恋人がいる人はほぼイコールとみなせるだろう。そうすると、およそ3割の壮年単身者には恋人がいるということになる(表2)。2点目は、恋人は原則として1人に限定されるということである⁷³。恋人が情緒的サポートとして機能している回答者に恋人がいるとするならば、恋人のいる壮年単身者のうち半数程度が重い手段的サポートを恋人に頼ることができる(表3)。このように、恋人はパーソナルネットワークのコアメンバーの一員とみなすことができる。

おそらく従来の調査票調査では、恋人はパーソナルネットワークから取りこぼされていたか、友人ネットワークのどれかに混同されて(たとえば恋人が同じ職場の人ならば、職場関係の友人の1人として数えるというように)回答されていたかのどちらかだろう。いずれにせよ、ネットワークにおける重要な他者を把握するためには、恋人はパーソナルネットワークの他の成員とは区別して把握されるべきだといえよう。

表2 恋人からの情緒的サポート

「おしゃべり・気晴らし」のみ	2.9%
「休日一緒に過ごす」のみ	3.1%
両方あり	23.4%
なし	70.6%
計 (n=796)	100.0%

⁷³ 恋人を同時に2人以上持つということは——もしかしたら、そのようなことが公然とおこなわれ、かつ許容される社会があるのかもしれないが——社会規範から逸脱する行動であるから、そのような行動をしている個人に恋人に関する質問をしたところで真実を回答しないだろう。というのは、その人にとって恋人に関する質問はセンシティブになるからである(センシティブな質問については Tourangeau and Yan 2007)。反対に、たとえ逸脱的だとしても恋人が複数いる対象者がいるかもしれないと調査者が考えて、恋人の人数を回答させる質問をするならば、そのような行為もまた逸脱的だと言わざるをえない。もしかしたら、調査者と回答者の双方にとって困難な状況を避けるために、Fischer (1982)は「フィアンセ」とか「ひとりの親友 (one best friend)」という言葉遣いをしたのかもしれない。なお、複数の恋人がいることと複数の配偶者がいることは異なる社会的状態であり、後者は一夫多妻制や一妻多夫制のように、制度的に認められている社会があることを付言しておきたい。

表3 恋人からの情緒的サポートと手段的サポート

恋人からの情緒的サポート	恋人からの手段的サポート (入院・介護時の身の回りの世話)		
	あり	なし	
「おしゃべり・気晴らし」あり (n=211)	51.2%	48.8%	100.0%
「休日一緒に過ごす」あり (n=210)	51.4%	48.6%	100.0%

4.2.4 年齢と恋人

恋人の有無は、これまで主として若い世代を対象とした調査で測定されてきた。壮年単身者調査は35歳から64歳までの年齢をカバーしているが、年齢層別に恋人からのサポートを受けた比率をみると、年齢層が高くなっても無視できない比率の人々に恋人がいるだろうことがわかる(表4)。単身化が言われる現在、調査対象の年齢にかかわらず、恋人はネットワークの成員として測定されるべきだろう。

表4 年齢層×恋人からのサポート

	おしゃべり・気晴らし	休日一緒に過ごす	入院・介護時の 身の回りの世話
35～39歳	31.7 (44)	34.5 (48)	19.4 (27)
40～44歳	33.3 (48)	30.8 (44)	20.0 (29)
45～49歳	23.6 (30)	22.7 (29)	13.3 (17)
50～54歳	23.6 (37)	24.0 (37)	15.0 (24)
55～59歳	21.5 (28)	18.6 (24)	10.7 (14)
60～64歳	22.0 (22)	27.4 (26)	13.9 (14)
合計	26.2 (209)	26.4 (208)	15.5 (125)

単位：％(人)

4.2.5 性別と恋人

パーソナルネットワークの構造には性差があることが様々な調査研究で指摘されている(中尾 2004)。今回の壮年単身者調査の結果からは、どのサポートネットワークについても男性(表5)より女性(表6)の方が多様なネットワークを持っていることがわかる。また、恋人からのサポートについて注目すると、女性の場合は「おしゃべり・気晴らし」が31.1%、「休日一緒に過ごす」が30.8%、「入院・介護時の身の回りの世話」が16.2%となっており、女性にとって恋人の存在は情緒的サポートとしての意味合いの方が強いといえる。男性の場合はやや異なっている。恋人からのサポートについて、男性は「おしゃべり・気晴らし」が16.8%、「休日一緒に過ごす」が18.1%、「入院・介護時の身の回りの世話」が14.7%となっ

ており、男性にとって恋人の存在は情緒的にも手段的にも同じ程度に重要なサポート源であると考えられる。

ところで、概して男性はサポート源を配偶者に依存しがちだということがしばしば指摘されている(石田 2011)。それと同じように、恋人に依存しているとまでは言わないまでも、単身男性にとって恋人という存在はサポート源として重要なかもしれない。いずれにせよ、恋人との関係を恋愛という関係として理解するのみでは一面的だろう。

表5 男性のサポートネットワーク

	情緒的サポート		手段的サポート
	気軽におしゃべり したり、気晴らし する (n=273)	仕事のない休日 に一緒に過ごす (n=271)	入院・介護時に身 の回りの世話をしてく れる (n=279)
親	23.8	10	31.2
兄弟・姉妹	20.1	7.4	33.3
子ども	2.6	3.3	4.7
恋人・(元)配偶者・パートナー	16.8	18.1	14.7
その他親族・親戚	5.1	1.1	4.7
学生時代の友人・知人*	37.4	20.7	—
仕事関係の友人・知人	53.1	20.3	13.3
近所の友人・知人	9.5	5.2	5.7
それ以外の友人・知人	26.4	19.6	6.8
ケアマネやヘルパー等行政の専門家**	—	—	15.8
その他**	—	—	4.3
誰ともしなかった／誰もいない	15.4	38.7	26.5

単位：%

*手段的サポートの質問に選択肢なし

**情緒的サポートの質問に選択肢なし

表6 女性のサポートネットワーク

	情緒的サポート		手段的サポート
	気軽におしゃべり したり、気晴らし する (n=524)	仕事のない休日 に一緒に過ごす (n=517)	入院・介護時に身 の回りの世話をしてく れる (n=525)
親	34.5	25.5	42.3
兄弟・姉妹	32.3	23	49.7
子ども	4.6	4.6	6.1
恋人・(元)配偶者・パートナー	31.1	30.8	16.2
その他親族・親戚	7.4	4.6	9.9
学生時代の友人・知人*	53.6	43.1	—
仕事関係の友人・知人	72.3	46.4	15.4
近所の友人・知人	10.5	7.9	6.3
それ以外の友人・知人	38.2	35.6	15.8
ケアマネやヘルパー等行政の専門家**	—	—	21.3
その他**	—	—	1.5
誰ともしなかった／誰もいない	2.7	9.9	9.7

単位：%

*手段的サポートの質問に選択肢なし

**情緒的サポートの質問に選択肢なし

5. まとめ

本稿では、まず、日本で行われてきたパーソナルネットワーク研究において恋人との紐帯が伝統的に見過ごされてきたことを指摘した⁷⁴。そのうえで、壮年単身者調査の世田谷分のデータセットについて再集計をおこない、恋人がパーソナルネットワークのコアメンバー（＝サポート関係）にあることを確認した。また、幅広い年代の単身者が恋人とのサポート関係を持っていること、単身男性は単身女性と比べて恋人にサポート源を依存する傾向があることを指摘した。

本稿は、恋人はパーソナルネットワークのコアメンバーであり、調査によってその存在を正確に把握すべきであると主張しているに過ぎない。そこで、これと関連して、今後検討すべきいくつかの論点を挙げておきたい。第1に、恋人がいること（いないこと）がパーソナルネットワークにどのような影響を与えるのかが問われなければならない。恋人の存在はネットワーク全体を活性化するか、ある部分を活性化するか、あるいは恋人にリソースを割く必要からネットワークを不活性化するかということは、実証的に明らかになっているとはいいがたい。第2に、恋人との紐帯の性質を明らかにしなければならない。恋人との紐帯は維持にコストのかかるものかもしれない。また、情緒的に親密で唯一であるため、否定的相互作用（＝マイナスの人間関係）に陥りやすいかもしれない。しかし、情緒的で唯一であるという意味では共通する家族員との関係とは異なって、恋人との紐帯は相対的に解消しやすいものかもしれない。また、一度解消されても、同じ人物（元恋人）か他の人物かは別として、再獲得の可能性も高い。第3に、サポート交換関係にある恋人関係とそうではない恋人関係は何が異なるのか、ということも重要な論点である。ネットワークにおける恋人関係の位置づけの違いなのか、恋人関係にある者同士の社会経済的属性によるのか、あるいはサポートを必要とする社会的状況によるのか。これらのほとんどが手つかずになっている。

現在、家族の多様化が進み、新しい家族のあり方が徐々に社会的・制度的に認められるようになっていく一方で、未婚化や少子化による家族の小規模化が進展している⁷⁵。家族の小規模化はサポートネットワークの縮小に直結する。必然的に家族・親戚以外に様々なサポートを求めざるを得なくなる。そこで、重要なサポート源となるパーソナルネットワークの成

⁷⁴ 谷本（1998）が指摘しているように、そもそも日本の社会学において、恋愛という社会関係が伝統的に研究対象となりづかったことも付け加えておきたい。もちろん、恋愛結婚が主流になったことを背景としたロマンティック・ラブ・イデオロギー批判が盛り上がった時期はあった。より近年になると、少子化の主要要因のひとつとして、あるいは社会的不平等の原因と結果として未婚化が注目され、配偶者獲得の過程としての恋愛行動への関心が高まっている。しかしながら、恋人との社会関係そのものが中心的な対象とされることは、若者論を除いて少なかったと言える。

⁷⁵ 家族の多様化と新しい家族のかたちについては、当研究所が『家族に関する研究』に取り組んでいた期間におこなわれた第7回から第9回のシンポジウムのテーマとして取り上げた。なお、第8回と第9回のシンポジウムについては概要を発行している（せたがや自治政策研究所 2016, 2017）。

員を人々はどのように獲得・維持しているか（することができていないか）を知ることが今後の調査課題として浮かび上がる。つまり、家族でもなく、一般的な意味での友人でもないような、重要な他者——多くの場合、これに恋人が含まれる——との紐帯のあり方を調べるということである。ある人の重要な他者との関係の内実、その形成過程と維持のされ方は、まず質的調査によって明らかにされなければならないだろう。その成果を踏まえて、調査票を用いた統計的パーソナルネットワーク調査も改善されなければならない。

[補遺]

サポートネットワークを測定している質問を調査票より抜粋

問 13 あなたは、次のようなことをどなたかとしていますか／しましたか。あてはまるものいくつかも○をつけてください。(それぞれ○はいくつでも)

	親	兄弟・姉妹	子ども	恋人・(元)配偶者・パートナー	その他親族・親戚	学校時代の友人・知人	仕事関係の友人・知人 (元同僚を含む)	近所の友人・知人	それ以外の友人・知人	誰もしなかった／一人で過ごした
回答例 ⇒	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(a) 気軽におしゃべりしたり、気晴らしする	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(b) 仕事のない休日などに一緒に過ごす	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
(c) 今年のお正月(1月1日～3日)と一緒に過ごした	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

問 26 あなたが病気やケガで入院や介護が必要になったとき、身の回りの世話をしてくれそうな方はどなただと思いますか。(○はいくつでも)

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 親 2 恋人・(元)配偶者・パートナー 3 兄弟・姉妹 4 子ども 5 その他親族・親戚 6 仕事関係の友人・知人(元同僚を含む) 7 近所の友人・知人 8 その他の友人 9 ケアマネジャーやヘルパーなどの行政の専門家 10 その他 11 誰もいない |
|---|

[文献]

- Fischer, Claude S., 1975, "Towards a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology*, 80(6): 1319-1341. (=1983, 「アーバニズムの下位文化理論に向かって」奥田道大・広田康生編訳『都市の理論のために』多賀出版, 50-94.)
- , 1982, *To Dowell among Friends: Personal Networks in Town and City*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Gottlieb, Benjamin H., 1978, "The Development and Application of Classification Scheme of Informal Helping Behaviours," *Canadian Journal of Behavioural Science*, 10(2): 105-115.
- Granovetter, Mark, 1973, "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78(6): 1360-1380. (=2006, 大岡栄美訳, 「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 123-154.)
- 原田謙, 2017, 『社会的ネットワークと幸福感——計量社会学でみる人間関係』勁草書房.
- 平松闊・鶴飼孝造・宮垣元・星敦士, 2010, 『社会ネットワークの研究・メソッド——「つながり」を調査する』ミネルヴァ書房.
- 星敦士, 2010, 「パーソナルネットワークを測定する」平松闊・鶴飼孝造・宮垣元・星敦士, 2010, 『社会ネットワークの研究・メソッド——「つながり」を調査する』ミネルヴァ書房, 25-48.
- ・石田光規, 2002, 「ネットワーク質問項目に対する無回答とその要因」森岡清志編『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会, 225-244.
- 石田光規, 2011, 『孤立の社会学——無縁社会の処方箋』勁草書房.
- , 2012, 「社会的サポート・ネットワークの測定法とその課題」『季刊・社会保障研究』48(3): 266-278.
- , 2017, 「中山間地域の間人間関係——パーソナルネットワーク研究を通じて」『地域社会学学会年報』29: 59-72.
- ・大槻茂実・脇田彩・井上公人・林浩一郎, 2016, 「たま・まちづくり研究会の概要と研究報告2」『都市政策研究』, 10: 13-74.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2017, 『現代日本の結婚と出産——第15回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書』.
- 久保田裕之, 2010, 「家族定義の可能性と妥当性」『ソシオロジ』55(1): 3-19.
- Marsden, Peter V., 2005, "Recent Developments in Network Measurement," Peter J. Carrington, John Scott, and Stanley Wasserman eds., *Models and Methods in Social Network Analysis*, New York: Cambridge University Press, 8-30.
- 松本康編, 1995, 『増殖するネットワーク』勁草書房.
- 森岡清志, 1998, 「パーソナルネットワーク研究の方法論的問題——標本調査と事例調査の検討」倉沢進先生退官記念論集刊行会編『都市の社会的世界——倉沢進先生退官記念論集』UTP制作センター, 205-225.
- , 2000, 「拡大するパーソナルネットワーク」森岡清志編『都市社会のパーソナルネッ

- トワーク』東京大学出版会, 195-205.
- 編, 2000, 『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会.
- , 2001, 「拡大パーソナルネットワーク分析の方法と意義——年賀状調査事例から」金子勇・森岡清志編『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房, 150-169.
- 編, 2004, 『改訂版 都市社会の人間関係』放送大学出版会.
- 研究代表者, 2006, 『パーソナルネットワークの地域間都市間比較に関する実証的研究』平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書.
- , 2008, 「拡大パーソナル・ネットワークの再編過程と生活戦略——3事例の比較分析」森岡清志編『講座・社会変動 第3巻 都市化とパートナーシップ』ミネルヴァ書房, 216-265.
- , 2010, 「家族の形態と機能」森岡清志編『社会学入門——基礎概念とその展開』放送大学出版会, 23-35.
- , 2013, 「ネットワーク論と都市社会学」『日本都市社会学会年報』31: 21-33.
- 森岡清美・望月嵩, 1997, 『新しい家族社会学 4訂版』培風館.
- 中尾啓子, 2002, 「郵送調査と面接調査——パーソナルネットワークに関する質問項目について」森岡清志編『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会, 197-223.
- , 2004, 「ジェンダーとパーソナル・ネットワーク」森岡清志編『改訂版 都市社会の人間関係』放送大学出版会, 150-159.
- 日本老年学会・日本老年医学会, 2017, 『「高齢者に関する定義検討ワーキンググループ」報告書』.
- 日本性教育協会編, 2019, 『「青少年の性」白書 第8回 青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- 野沢慎司編・監訳, 2006, 『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房.
- 大谷信介, 1995a, 『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク——北米都市理論の日本的読解』ミネルヴァ書房.
- , 1995b, 「〈都市的状況〉と友人ネットワーク——大都市大学生と地方都市大学生の比較研究」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房, 131-173.
- せたがや自治政策研究所, 2016, 『第8回せたがや自治政策研究所主催シンポジウム「若者・家族のいまと未来を考えよう」講演概要』.
- , 2017, 『第9回せたがや自治政策研究所主催シンポジウム「新しい家族のかたち」講演概要』.
- 高木竜輔・矢部拓也, 2002, 「吉野川可動堰をめぐる徳島市民の署名活動とパーソナルネットワーク」森岡清志編『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会, 149-172.
- 谷本奈穂, 1998, 「現代的恋愛の諸相——雑誌の言説における社会的物語」『社会学評論』

49(2): 286-301.

特別区長会調査研究機構, 2020, 『令和元年度 調査研究報告書 特別区における小地域人口・世帯分析及び壮年期単身者の現状と課題』公益財団法人特別区協議会.

Tourangeau, Roger and Ting Yang, 2007, "Sensitive Questions in Surveys," *Psychological Bulletin*, 133(5): 859-883.

Wellman, Barry, 1979, "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology*, 84(5): 1201-1231. (=野沢慎司訳, 2006, 「コミュニティ問題——イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 159-204.)

Wirth, Louis, 1938, "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology*, 44(1): 1-24. (=松本康訳, 2011, 「都市的生活様式としてのアーバニズム」松本康編『都市社会学セレクション 1 近代アーバニズム』日本評論社, 89-115.)

矢部拓也, 2000, 「事例分析——年賀状による拡大パーソナルネットワークの分析」森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』東京大学出版会, 161-193.

——, 2002, 「拡大パーソナルネットワーク概念と年賀状事例調査の方法論的検討」森岡清志編『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会, 123-148.

柳信寛, 2002, 「パーソナルネットワークの変容とライフコース——男性高齢者における定年退職の影響」森岡清志編『パーソナルネットワークの構造と変容』東京都立大学出版会, 173-193.

安田雪, 1997, 『ネットワーク分析——何が行為を決定するのか』新曜社.

——, 2011, 『パーソナルネットワーク——人のつながりがもたらすもの』新曜社.